

校長室からこんにちは！

No. 30

2月13日

発行者 中田 禎二

未来志向

『元来、教育という仕事は、未来に向かってなされる営みです。この意味からは、「未来志向」という言葉を改めて言う必要はないのです。しかしながら、現状はどうかと言えば、なかなか減らない「勉強嫌い」や「学校嫌い」に、親や、教師は、頭を悩ませています。また、社会に目を向けたときにも正義感や倫理観の低下が見られ、規範意識の欠落や…近年では、これに、大人による児童虐待や養育放棄、ときに凶悪な犯罪までも加わる始末です。これではまったくもって、子どもたちが生き生きとした未来への展望…夢や希望をもち、思いを巡らす環境にあるとはとても言えません。それゆえ、こうした状態からの脱却を求めて「未来志向」という言葉を言わなくてはならないと考えるのです。』

少し引用が長くなりましたが、これは福岡教育大学学長の寺尾慎一教授の著書「豊かな学びをひらく授業の構想」の巻頭言です。

教育はいつの時代も学ぶ者の未来に拓かれています。例えば、幕末、大阪の適塾では海外に目を開いた若者たちの1冊のオランダ語辞書を求めての熾烈な競争がありました。寺子屋では将来のために読み書き算盤を習いました。

では、豊かな国、日本の現在はどうなのか、ほんとうに未来に向かって教育しているのか、との寺尾学長の課題意識を学校経営の参考に、私は「夢を抱く学校づくり」「夢を育てる指導」を行っています。

本校は間もなく充実・発展の初年である4年目を終えます。目の前に居る子どもたちは1年前に比べどう成長しどんな課題が生まれたのでしょうか。そこを見つめながら、この子らの未来に向かって「未来を志向した」取組みを十分してきたかとの問いかけが必要だと考えています。

取組みの柱の一つとして、規律を身につける指導をしてきました。具体的には、丁寧な礼、挨拶、返事、靴のかかとを揃える。こうした細々したことを繰り返し言ってきました。また、開校以来の無言の掃除も行っており、両手と両膝をついての雑巾がけが日常的になっています。しかし、それは学校だけがやっていたのでは決して続かないし身に付きません。子どもの姿を見る度に、教師の指導を振り返りつつ、そこに親の躰の大切さを感じています。

未来に向かっての学びは、そんな、かつてはどこでも当たり前に見られた生活レベルの風景にその原点があると考えています。ですから、私は家庭教育こそが『未来志向』の出発点と考えます。

校長写真館



2月7日、第2回スポーツテスト。自己最高記録更新を目指す子どもから、屋外で運動ができる喜びが伝わってきました。明日の砂丘マラソンも楽しみです。

ちょっとお耳を…

どのクラスにも「わんぱく」がいる。もちろん、私の教え子たちにも忘れられない面々がいた。

それは午後から授業参観という日の昼前だった。大きな瞳に涙をいっぱい溜めた、普段「わんぱく者」の〇君、私の前にやって来た。

また何か仕出かしたのかと思いきや、「今日お母さん来んのんじゃ。(来ない)」と精いっぱいの言葉。「ぼくが頑張ったことはお母さんに伝えるけえ。(つたえるから)」と返してやると、大粒の涙が溢れ出た。

後日母親に伝えたら、幸せそうな微笑みとともに潤んだ瞳がそこにあった。

独身時代の映像から消えることのないひとコマ。